



国道451号を^{はます}浜益から滝川に向けて車を走らせると、5kmほど先で黄金山が突然特異な姿を現わす。富士山の上半分を切り取ったような姿で、地元で親しみを込めて「浜益富士」、「黄金富士」と呼ばれるのも納得できる。

この山容は、新第三紀鮮新世の火山活動により岩脈が突出し、その後、周囲の地層が風化、浸食を受けてできたものという。「黄金」は和人が古くから砂金採りに入ったから付けられたものと思われる。

アイヌ語では「ピンネ・タイオルシベ」（樹叢の平原に聳える雄山）。「マツネ・タイオルシベ」（同じく雌山）の^{すりばちやま}播鉢山と夫婦の山だとされてきた。

また高澤光雄氏の『北海道の登山史探究』（北方新書）には、金田一京助の研究によるとして、日高国平取のハヨピラの丘や石狩国浜益の黄金山か播鉢山がアイヌの叙事詩ユーカラの発祥の地ではないかという説が紹介されている。英雄ポイヤウンペのチャシ（砦）がトミサンベツ（現在の^{びしゃべつ}毘砂別）、シヌタブカ（黄金山か播鉢山）にあったという話は、黄金山をさらに魅力的な山にしている。石狩市教育委員会の資料『黄金山』によれば、ポイヤウンペは洞爺湖のオヤウカムイという羽の生えた蛇神と戦って傷つき、石狩へ遁れ、さらにトミサンベツの黄金山（コンカニヤマ）の金の館に難を逃れたとある。

国道451号から分かりにくい標識を探し、兼平沢林道に入ると、行き止まりが登山口の駐車場だ。トイレもあり、10台は駐車できる。

兼平沢沿いの足下の悪い道を辿ると、2本の小沢を渡る。ダケカンバ、ミズナラ、エゾマツ、ホオノキなどの樹林を行くが、ロープが現れると沢と別れ尾根に取り付く。勾配は次第に急になる。

30分ほどで小広い平地に出る。新道と旧道の分岐である。水場がある。「777」とパチンコのような標識があり、「頂上まで1107m」というものもある。つまりは登山口から山頂まで1884mあるということだ。

旧道は荒れて廃道同然なので、右にとって新道を行く。一投足で樹林を抜けササ原となる。疎らなブナがアクセントとなって、歩きやすい道だ。見上げると、山頂が覆いかぶさるように迫って見える。

「1000」標識を過ぎ、再び樹林に入ると、道は次第に傾斜を増して来る。6月にはニリンソウやオオサクラソウ、エゾエンゴサク、サンカヨウ、クロミノエンレイソウ、エ

ゾノリュウキンカなどを見かけることもできるだろう。7月に登れば、エゾアジサイやクワノキなどに加え、増毛山地と樺戸山地の固有種であるマシケレイジンソウの淡いクリーム色の花も楽しむことができるかもしれない。

傾斜はさらに厳しく岩場混じりとなって、ベタ張りのトラロープを頼りの急登が続く。「1400」を過ぎた先に旧道との合流点がある。「147



m」に元気付けられる。岩に縋り付くように登ると、岩峰の上に躍り出る。山頂かと思うだろうがさにあらず、前衛峰である。「1820」標識がある岩峰は左右切れ落ちて高度感たっぷりである。

さらに細い尾根を少し下り、登り返した先が山頂である。二等三角点標石と山名標識、さらに「1884」標識がある。狭い山頂に立つと、晴れていれば四方遮るもののない大展望が広がっているだろう。南暑寒別岳、群別岳、浜益岳などの増毛山地やピンネシリや神威尻山の樺戸山地が迫り、彼方には石狩湾や手稲山など札幌近郊の山々も望むことができる。

帰りは来た道を慎重に下ろう。

二万五千図：浜益

交通機関：滝川か札幌からレンタカーがお奨め

問い合わせ先：石狩市浜益支所 0133-79-2111

最寄りの温泉：石狩市浜益保養センター「浜益温泉」 0133-79-3617